

心臓・血管病から道民の健康と明るい生活を守ります

No.114

2012 2月

すこやか

北海道心臓協会30周年記念
市民フォーラム2011特集

「命を見つめる」

旭山動物園園長 坂東元氏 …………… 1

「あたり前の暮らしを求めて」

脚本家、演出家、劇作家 倉本聰氏 …………… 13

質問・討論コーナー「北の国から元気を出す工夫」

坂東元氏、倉本聰氏 進行：長谷部直幸氏 …………… 14



ハート

■ホームページアドレス <http://www.aurora-net.or.jp/life/heart/>



「北海道心臓協会30周年記念 市民フォーラム2011」開催される

主催：北海道心臓協会、北海道新聞社

北海道心臓協会30周年記念市民フォーラム2011が10月29日、「願いは健やかハート」をテーマに札幌の共済ホールで開催されました。プロジェクターを使って分かりやすく説明される坂東元氏のユーモア溢れるお話に笑い声が起り、現在の便利な生活と昔の生活を比較され問題提起される倉本聰氏のお話に深くうなずき、また質問・討論コーナーでは旭川医科大学教授・長谷部直幸先生の軽妙な進行で和やかに進み、大変充実した集まりでした。また、講演に先立って医師、看護師、薬剤師、栄養士による無料健康相談が開催されこちらも好評でした。

北海道、北海道医師会、札幌市医師会、北海道国民健康保険団体連合会、北海道看護協会、北海道薬剤師会、北海道栄養士会の後援、アステラス製薬(株)、MSD(株)、第一三共(株)、武田薬品工業(株)、日本ベーリンガーインゲルハイム(株)、ノバルティスファーマ(株)、ファイザー(株)の協賛に改めてお礼申し上げます。

**北海道心臓協会30周年記念
市民フォーラム2011「願いは健やかハート」**

日時：2011年10月29日（土）
場所：共済ホール（札幌市中央区北4西1 共済ビル6階）

講演の部

13:10 開場 13:30 開演

●主催者挨拶および第22回伊藤記念研究助成金贈呈式
司会 菊池健次郎氏 北海道心臓協会副理事長、旭川医科大学名誉教授
挨拶 伊藤 義郎氏 北海道心臓協会理事長、株式会社伊藤総社長

13:50 ●30周年記念特別講演 旭川医科大学内科学講座
総合司会 長谷部直幸氏 循環・呼吸・神経病体内科学分野教授
<講演第一部>

座長 三浦 哲嗣氏 札幌医科大学医学部内科学第二講座教授
演者 坂東 元氏 旭山動物園園長
「命を見つめる」

14:40 <休憩>
<講演第二部>

14:50 座長 筒井 裕之氏 北海道大学大学院医学研究科循環病態内科学教授
演者 倉本 聰氏 脚本家・演出家・劇作家
「あたり前の暮らしを求めて」

15:50 質問・討論コーナー「北の国から元氣を出せ工夫」
坂東 元氏、倉本 聰氏 進行 長谷部直幸氏（順不同）

16:20 終了

無料健康相談

共済ホール 特設コーナー 10:30受付開始 12:15最終受付
●医師、看護師、薬剤師、栄養士による循環器疾患に関する無料相談

主催：北海道心臓協会、北海道新聞社
後援：北海道、北海道医師会、札幌市医師会、北海道国民健康保険団体連合会、北海道看護協会、北海道薬剤師会、北海道栄養士会
協賛：アステラス製薬(株)、MSD(株)、第一三共(株)、武田薬品工業(株)、日本ベーリンガーインゲルハイム(株)、ノバルティスファーマ(株)、ファイザー(株)

講演 命を見つめる 坂東 元氏 旭山動物園園長、ボルネオトラストジャパン理事



皆さん、こんにちは。今日は心臓協会主催ということで、和やかにやっているものなのか、神妙にやらないものなのか、ちょっと迷っています。

震災と原発の問題とか、何か色々なことがそろそろもう限界だよというところまで来ていながら、なかなか変わらない社会があって、本当に思い切って何か価値観とか幸福感とか豊かさを実感することなどを変えていかないといけないようなところにあるような気がします。今日は動物たちの暮らしを見ていただきながら、いま一度自分たちの暮らしだったり、命は大切というんだけど、何が大切なのかなみたいなのをちょっと考えてもらえる場になればと思っています。

旭山動物園は有名にはなりましたが、有名になろうと思ってやってきたわけではなく、どんな命もみんなすばらしいよねということを共感してほしいと思って、色々な取り組みをしてきた結果が今なのです。たまたま数字がついてきて、変に経済的なこと

の話題が多くなって、自分たちとしてはちょっと不本意なところですけども、これから本当にしっかりと北海道で暮らすということの豊かさなどを実感できるようなことにつながっていくことをしていきたいなと思っています。

札幌では、最近ヒグマが出てきて大騒ぎしていますが、昔からヒグマはいたわけですが、関わりがないときは関心を持たない、不都合なところが出てくるともう要らないみたいな…。新聞を見ていたら、ドングリをやって山に追い払えみたいなことが出ていましたけれども、それは違うだろうと。彼らはずっと昔から僕らを見続けてきているわけで、だからその中で北海道の豊かさって何なのかなと考えたいと思います。

北海道はそんなに広い島ではありませんが、500万人以上の人が入っていて、今3000～5000頭のヒグマがいると言われてます。地球上でこれだけ狭い島の中にこれだけ沢山の人がいて、地上最大の肉食獣が3000、5000といるところってないんですね。本当に奇跡の島なんです。だから、僕たちがそういうところに暮らしていて、何を豊かに感じるのか、もっと

クマが出てくることを誇りに思ったほうがいらいな、本当はそんな北海道でありたいと思います。

旭川のほうも今サケが遡ってくるようになってきたんです。それはもともとは川をきれいにしましょうということや、堰堤をつくり過ぎてしまって魚が遡ってこれないことから、サケを川の豊かさの象徴みたいにして、地道な活動をして遡ってきたのですね。そうして、サケがいっぱい遡ってくると、そこにクマが出てきたらどうするんだみたいな議論になってきます。出てきたら困るんですね。

サケが遡ってくるのを目的に思うからそういうことになるので、本当はサケが遡ってきた豊かさって何なのかというところをもっと先に目的を持っていけば、もっと違う豊かさみたいなものを本当に感じられるようになるんじゃないのかなと思ったりします。

ということで、動物園の僕らの理念みたいな部分も含めつつ、命というものをどうなんだろうというのを考えてもらえたらなと思っています。

自分はもう二十数年前に旭山動物園に獣医として入りましたが、当時は本当にぼろぼろの動物園で、お客さんも減り続けている時代だったんです。たまたま獣医に空きができたからということで、「あと数年でなくなる動物園かもしれないけど来るか」と言われました。確かに入ってみたら、本当にこれはもう気が遠くなるようなぼろぼろさかげんでした。当時何がうれしかったかというと、色々な動物園を見に行きましたが、上には上が、下には下があって、うちよりぼろいところってやっぱりあるんです。それを見つけたらうれしくて、もう帰ってきたらその話題で持ち切りみたいな動物園でした。

ただ、自分も野生動物などを見たことがあったわけではないし、素人的な感覚でしたが、動物たちと関わってみると、つまらないよと言われている動物たちが本当はすごくすばらしくて、命の価値というんですか、色々なものががらがらと変わりました。

自分が獣医を目指したというのは、人間的な感覚の中で「命は大切」みたいなものがあって、例えば痛みをとること、長生きすること、病気を治してあげること、そういうことが命を大切にすることだとずっと思っていました。動物園は閉鎖された環境に動物を閉じ込めているんですけども、その命に関わってみると、生まれたら必ず死んでいくんですよ。うちのような大きくない動物園でも、毎年100位の動物が死んでいくんです。その死をずっと見続けている中で、生きるって何なのかなと、自分たちが命に対してどう関わるべきなのかと価値観がどんどん変わりました。その中で、つまらないじゃなく、すばらしいと伝えたいという思いがみんなの共有するものになっていきます。



北海道では帯広だけに1頭ゾウがいます。昔うちにもゾウがいて、自分は獣医で入ったんですが、当時全職員10人位の本当に小さな動物園で、獣医というよりも飼育員時々獣医みたいな感じでした。入ったんだからやってみろみたいなことでゾウの飼育などを任されたことがありました。どの生き物もそうですが、ゾウなんかは特に本当に1頭でぼつんといたんですね。別々の種類が2頭、別々の

場所にいたんです。本当に平たんな時間の流れの中で、何十年もぼつんと1頭でいるのですが、本当はゾウってすごく社会性があって、唯一年齢を人と同じに考えていい動物なのです。すごく変わった生き方をします。例えば出産する能力がなくなっても、物知りおばあちゃんのようにずっと群れの面倒を見てという生き方をして、人に近い感覚で生きる生き物なんです。それがたった1頭で、10年、20年ぼつんと動物園にいて、見た目というのがじゃなくて、ゾウとして振る舞って生きているんです。何かそれが感覚的なものなので本当にすごくて、きれいな大きな目をしているんですけど、何か目が合うと、もう一方的にすいません、ごめんなさいと謝りたくなるような、本当に存在感のある、本当にでんと揺る

がない存在でいました。

でも、やっぱりどんどん年をとって行って、最後の歯がすり減ってしまって、餌も食べられないようなぎりぎりの状況になったときに、秋口に足にけがをして、春に死んでいくんですけれども、ずっとその彼に関わって見ていました。

右足の裏の小さなけがだったので、本当は麻酔してちゃんと治療して、診てみたかったのですが、体重が重たい動物なので麻酔して倒れてしまうと、何時間も同じ側を下にして寝ているとしびれちゃうんですね。しびれちゃうと立てなくなり、立てないというのはもう致命的なことなので、ローテーション

しなければならないんです。右下だったら、次左下みたいに入れかえてあげなきゃならないのですが、体重が重たいので人力では無理だから機械でやろうということになって、天井の梁から機械をつけて、持ち上げる仕組みをつくらうとしたんです。でも古い施設なので、ゾウを持ち上げようと思ったら、天井が抜け落ちるからやめろと言われて、できなかったんです。対症療法といって、直接的なけがの治療ではなくて、レーザー治療だったり、抗生物質だったりとか、洗浄だったりというような治療をずっと続けて、あまり痛いことはできないのですが、毎日関わってきました。

どんどん足が悪くなって行って皮膚が破けた状態になったとき、医学的に見てかなり痛みを伴う状態になってくるんですね。右足をかばうので、今度左の前足に無理がかかってきて、左の前足もどんどんだめになっていく。毎日消毒したりしていたんですが、ふとアサコと目が合った時に、何も訴えてこないんですね。何で自分がこんな目に遭ってるんだとか、早く治せという目をしないんです。元気なときのきれいな目をしたまま、ずっと淡々といるんです。今でも本当に思い出すんですけれども、これだけの

痛みを持っていて、何でこんな目をしたままでこういう表情でいられるのかなと思いました。

でも、どんどん症状は悪くなって行って、いよいよもう足がつけられない状態になってきました。このアサコは24時間立ったまま生活するゾウで、寝ているのを誰も見たことがないんです。アサコにとって自分の中で寝るということがどういうことを意味するのかを多分感じていたんだと思うんですけれども、絶対横にならない。今度ひじをつけて歩くものだから、ひじがもうすりむけちゃってひどい状態になる。鼻もすりむけてひどい状態になる。

当時うちの動物園は本当に予算もなく、1万円の

修理費が出てこない動物園だったんです。何もしてやれなくて、小学校、中学校へ電話して、使わない体操マットが1枚でもあったらくださいとお願いし、1枚でもあったら、トラックで飛んで行って貰ってきました。せめてと思って、頭を預ける台をつくってやったりしましたが、どんどん悪くなって春4月に入ったころ、ある朝倒れていました。倒れて初めて足のけがの状態を見ることができたのです。もう右足は肩まで骨が腐敗している状況になっていました。



皮膚が破けた状態のアサコ

予後不良でもう先はないよという状態で、自分は痛みをとることしかできなくて、その1週間後に死んでいきました。ただ、本当に死ぬまで目が迷わなかったですね。本当にきれいな元気なときのまの目をして死んでいきました。

これが別にゾウだけではなくて、例えば交通事故で来る足がぼろぼろに砕け散っているようなエゾシカだってそうだし、ひなで持ち込まれるスズメもカラスもそうなんです。どうして自分が、何でこんな目に、何でおまえがこんなことをしたんだという目をしないんです。淡々と元気なときの本当にきれいな澄んだ目をしたまま、命を終わっていくんです。

そういうことをずっと見続けていて、自分のやっていることって何なんだろうかと、獣医というものって何なんだろうかとすごく考えるようになりました。命を長生きさせたりすることって、もしかしたら彼らはそれを望んでいるわけではないのかもしれないと、思うようになりました。自分が思っている生命観、命の大切さということとはちょっと違う生き方とかとらえ方があるんだと。相手を知るとか相手を本当に思いやる、相手の立場に立って物を見ている、そういうことの大切さみたいなことにすごく気づくようになりました。

多分、人も昔は、きっと医学という概念がなければそうだったと思うんですけども、そういう概念がない動物たちは、痛み、苦しみというのも受け入れるという生き方がある、その受け入れた中で生きられるうちは生きますよ、生きられなくなったら終わっていただくなんですよという、すごくシンプルな生き方をします。どんな動物もみんな一緒なんです。だからぶれるということがなくて、誰かと比較してうらやむということをしなくて、自分はすごいよと自慢することがな

くて、本当に生きるということに純粹で、気高くて、尊くて。それが面白い、面白くない、珍しい、珍しくない、そんな薄っぺらな感覚の中で見られ続けて、狭い、臭い、かわいそうの三拍子みたいな動物園になって、自分たちの中ではすごく悔しい思いというんですか、本当はこんなのであってはいけないという思いがすごくありました。これはもう獣医もそうだし、命を直接預かっている飼育員たちも同じ意識を持つようになっていきました。

犬も犬種のブームがあるように、動物園でも結構動物のブームがあるんです。日本の動物園は、江戸時代までないんですね。明治に入って、欧米の文化が入ってきたときに動物園ができて、共に暮らすと

いうよりも、囲って見せるという欧米型の感覚にどんどん変わっていったのだと思います。その頃から、客寄せパンダに始まり、珍しい動物、見たことのない動物を次々に持ってきて、沢山の人来てもらうという見せ方になってきて、うちはそういうところから取り残された動物園で、施設もぼろぼろだったんです。そのような色々な動物ブームの中に巻き込まれていっても、そういう動物もいないという状態でした。

そのうちアザラシ館というのができて、全国区になっていくんですけども、「ラッコいないの？ラッコいないの？」と、二十数年前、ラッコの大ブームがあったときに言われました。人間は社会をつくるという部分でどうしてもそういう面が出るんですけど、相対的に物を見ますよね。例えばラッコのブームになると、ラッコがすごい生き物になるんですよ。「ラッコがすごい」と言うと、対として「すごくないもの」が必ず生まれるんですね。例えばお金持ちがいたら、貧乏な人が、勉強ができる人がいたら、勉強ができない人がいる。常に相対的な価値観で見えています。ラッコすごいよ、



ラッコすごいよとなると、感覚の中で必ずすごくない生き物が出てくるんですね。それが当時はアザラシだったんです。うちのアザラシの池のところに来ると、なぜかお客さんは「ラッコいないの？」とアザラシを見て聞くんです。「いませんね」みたいな話になっていたんですけども、それがすごい悔しかったです。

そんなことで、いつかアザラシだってすごいよと見てもらいたいということで、アザラシ館ができて、ただ自分たちの中ではそんなに何か特別のことをしているわけじゃなくて、アザラシらしくという、自分たちがすばらしいと思うものに共感してほしいと。ウケるというのではなくて、共感してほしいと思っ

てつくってきたのです。この施設ができて、自分たちも予想しないような人が沢山来るようになってきました。水族館の人たちも沢山来ましたがラッコすごいよと見せていたので、当然アザラシなんてと思っていたわけです。でも、百数十年の日本の動物園、水族館の歴史の中で、ショーとか芸をさせて拍手が起きたり、わーっと歓声上がることはあったけれども、何もしないあたり前の姿、ありのままの姿の中でその人たちがわーっと歓声を上げたというのは、多分この施設が初めてだと思います。しかも、それがただのアザラシで起きたわけです。そんなことで、色々な意味で色々なものを見直すというか、本当に根本的な価値観を変えていく原点になった施設になりました。

実はペンギン館というのをその前につくっていて、地元では結構話題になっていました。昔動物園は子どものために行く場所だったんですけれども、これができて結構大人同士で来られ始めたのです。何十年ぶりに動物園に来たというおじいちゃん、おばあちゃんとかも結構来られて。うちは、よちよちしたペンギンというあのイメージよりも、最初に水中のほうを見に来るという仕組みになっているんです。おじいちゃん、おばあちゃんたちが入ってきて、目の前に泳いでいるのを見ながらペンギンを探していたんですよ。「ペンギンどこにいるんだ」みたいな話をしている、おじいちゃんが「ところで目の前に何か泳いでるんだけど、これ何だ」、おばあちゃんが「これ、きっとマグロの一種かなんかだよ」。これ本当なんですよ。

僕も、人間って何か動物の一種位に見て観察するんですけど、人って結構価値観を決めます。だんだんと知らない間に、自分の中でこの人はこういう人とか、色々なものの価値というのをつけていきます。動物は、かわいらしいところに価値を見つけて、そ

こをずっと見続けます。そうすると全体が見えない。ペンギンが何を食べている生き物なのか、どこで生活しているのかとか、全然考えなくなるんです。可愛いところだけ、ああ可愛い、可愛いになっていって。うちは別にペンギン館も特別なことをしていません。ただ泳いでいるだけです。空を飛ぶのと同じ理屈で水中を飛んでいる。その姿を見てもらっただけで大人同士の人に来るようになったというのは、きっと何かすごく自分で思っていたものと本質的なところで何か気づきがあったり発見があったりするから、沢山の大人の方が来る動物園になったのかななんて思ったりします。

これから冬になりますが、ペンギンの散歩はすっかり冬の定番になりました。結構うちの動物園へ来



られた方に、「ペンギンのパレード、何時からやっているの」と聞かれるのですが、「パレードはやっていないんですけど」、「散歩ならやってますよ」と。犬を飼われていたら、別に散歩の訓練しないですよ。犬は外へ出て歩きたい動物、ペンギンも外を歩きたい動物。だから出してあげているだ

けで、毎日ゴチゴチと頭をぶつけながら出て行きます。みんな一律ではないです。こういう何か間の悪いやつって、やっぱり群れの中には必ずいて、待ってみたいに行くんですけど、ただこれがロープも張らずにやるので、すごいパレードとか行進みたいなイメージがついて歩くんです。よちよちよち行くんですけど、ペンギンの散歩はお客さんに並んでもらうと、ペンギンは空いているのはここしかないじゃないですか。だから、何かそこを淡々と歩いていく、それがペンギンの散歩なんです。ただペンギンは、あたり前ですけど、人に可愛いと思われたくてこんなよちよちした姿になったわけじゃないですね。たまたま僕らはそこにかわいらしさを見つめるんですが、ペンギンは水中を飛ぶ鳥になり

ました。空を飛ぶのはやめました。でも、卵を産んでひなを育てるのは陸上でしかできない。だから、陸上に最低限の能力を残したんです。人間でもつかまえられるということは、自分たちを陸上で食べる動物がいないところでずっと暮らしてきた結果の姿なんです。そこにたまたまかわいさを見つけている。だから、可愛いから入ってしまうと、何を大切にしなければならぬのか、何を守らなければいけないのかということが見えなくなるような気がします。

うちは寒さと雪がテーマです。寒さと雪の中でこういうふうには本当に美しい姿で歩くペンギンを、頭の知識ではなくて心に残してほしいと思っています。例えば地球が暖かくなりますよ、気候が変わってきましたよといったときに、そのことが何か心で感じられる。やっぱり心で感じないと、多分行動には移らないと思うんです。頭の知識は誰かがやればいでしょうという理屈の世界で、心が痛むとやっぱり人ごとではなくなります。自分たちの暮らしをもう一回見つめなければとか、そういうところにつながってほしいなと思ってやっています。ただうちで話題になると、

沢山の人に来るんだなということで、本州なんかでもペンギンを飼育しているところは、冬期限定みたいなので外へ出すことが多くなりました。でも、なぜか音楽が鳴っていたり、着ぐるみを着た人が先導していたり、手拍子していたりとかなるんですよ。一番ひどいところになると、ペンギンにちょうネクタイみたいな話になるわけです。それって何かというと、だから見に来てねということですよ。要するに道具ですね。自分の動物園、水族館のための道具になってしまう。色々なところでそういうことが多いような気がします。人の経済という部分で、お金を使ってもらおうという部分で、本当は誰のためにやっているのかということをもっともっと真剣に見つめられればいいなと思ったりしています。



ペンギンの散歩

さて、ちょっと生き方というか、僕らの暮らして何なのかなということをお話したいと思います。人間って何か面倒くさいじゃないですか。僕が獣医になったのは、獣医だったらあまり人と関わらないで生きていけるのかなと思って獣医になったので、僕は人前に出るのはすごく嫌だというか、苦手なんです。嫌だったんですけど、仕方がないじゃないですか。たまたま園長にもなってしまったし、どうしようもない状況になっていたんです。でも最近何か吹っ切れたのは、よく人も動物だと言うじゃないですか。サル的一种だということなので、サルだと思えば平気なんだということに気付いたんです。サルに話しているんだなと思ったら、変わったサルがいるぐらいに、何かすごい気楽に話せるようになって、最近ちょっと吹っ切れているんです。サル

として生きているのに、でも環境と一緒に生きられなくなってしまって、自分たちだけの生き方を選んで、それがどう見ても崩壊のほうに向かっていっていると思うんです。生きるって何なのかなということで、オランウータンの子育ての話をしたと思います。

結構有名になったオランウータンの施設がありますが、これは人に奇をてらって高いところをといるものではありません。動物園にいる動物が幸せというのはどこか絶対うそです。やっぱり人のエゴでつくった場所に命を閉じ込めている場であって、だけど僕は命を預かっている以上は、やっぱりその動物らしく一生を送らせてあげたいという思いがあるんです。だから、見た目ということではなくて、暮らしということ、彼らしく暮らしてほしいということでこの施設はできています。平成13年位にできていますが、その当時いたのがリアンという今お母さんになっている雌です。

人、オランウータン、チンパンジー、ゴリラは人科の動物なんですね。見た目の差はありますが、遺

伝子が本当に1%も違わないような差です。

飼育していると思うのは、彼らは言葉という伝え方をしないですけども、現代人と比べると、多分心とか感情とか、そういうものの豊かさというのは、ずっと生き物同士、その個体同士の関わりを持って、コミュニケーションをとって生きています。オランウータンだけがあまり群れをつくらないんですね。すごく変わった生き方をして、密集していないというか、個体同士はわかっているんだけど、それぞれ距離をとって暮らしをします。ジャングルの中でもそうです。

このリアン、もう10年位前ですけども、当時10歳でした。繁殖適齢期で、人間的に言うと20歳位になるんですが、ちょうどお姉ちゃんになりましたよぐらいのところでした。相手を見つけようということになったんですけど、当然自然の中にいるわけではないので、自分で見つけるということではできません。誰か見つけてやらなければならないんですけど、オランウータンは、飼育下では繁殖がすごく難しいとされている動物です。雄と雌の体格差がすごくあるんです。雌が40~50キロ、雄が100キロを超えるんですが、その100キロを超える体重を指1本で簡単にぶら下がる。だから、指1本に100キロ以上の力があって、握力は400キロ、500キロと言われているんです。本当にばか力です。

結構ねちねちした性格をしていて、考えて考えてから行動するんです。例えば閉鎖された環境の中で大人同士と一緒にした場合、雄が圧倒的に強いんです。だから、気に入ったらいいんですが、気に入らなかった場合、ちょっと本気になってぐっと力を入れてしまうと、雌は簡単に死んでしまうんですね。だからペアリングが難しいとされている動物です。

飼育下でよくやるのは、すごく不自然なんですけど、小さいときに雄と雌の飼育を始めて、そのままいわずけのように大人になって、ペアになってもらう。だけど、相性が合わなかったりとか、本来はもっと親と一緒にいなければならないときから子ども同士

で大人になっていくので、例えばちゃんとした交尾ができないとか、色々な障害があって、繁殖しないことが多いんです。

色々探したのですが、なかなか同じ年ごろが見つからずに、やっと見つかったのが、今は父親になっているジャックでした。これは東京の多摩動物園で生まれて、いいなずけと一緒にいて大人になったんですが、交尾ができなかった、乱暴だったと。雌が先に死んでしまったのですが、この個体と誰かを一緒にしようという発想を持たないので、転々として、最後広島のアサ動物園というところにいたのです。

でも、うちはこれしかないから、これでいこうということになったんです。当時ジャックは20歳、人間的な感覚で言うと、40過ぎ位のちょっと中年のおっさんになりかけみたいところでした。ジャックにしたらいいかもしれないけど、リアンにしたらとんでもない相手だみたいところですけども、まあこれでいこうと。

ただこれは、普通動物園界ではあり得ない組み合わせなんですね。何故これにしたかという環境なんです。オランウータンらしく、自分らしく体が使えること。自分らしく何か感覚的なものがとらえられるときって、物の見方とか考え方とか感性とかがどんどん変わりますよね。リアンは立体的な施設の中で、自然とまでは言わないけれども、色々なものが少し開放されています。オランウータンらしくという部分で開放されています。だから、物事の見方、考え方、

組み立て方というのがすごくオランウータンらしくできるだろうと。ジャックは20年間、2次元の平面的な生活なんですね。ああいう立体的な施設は当時なかったので、20年間平面で生活しています。オランウータンは、おもしろそうだからやってみようは絶対しないんです。本当に自分の中で考えて、理屈を立てて、大丈夫だと判断しないと行動に移さない生き物です。それは本当にすごいですよ。

ちなみに、ま逆なのがチンパンジーです。チンパンジーはやってから考えます。やっちゃった、どうしようと。人間も何かチンパンジー型とオランウー

考えてから行動するオランウータン

タン型がいるような気がします。オランウータンのジャックはあの施設に入れたからといって、すぐに登ってみようは絶対にしないだろう。環境の中で雌のほうが圧倒的に優位なうちに一緒にすれば、リアンがリードする形で一緒にいる可能性があるんじゃないかということで決めたのです。

檻越しに何日間かお見合いをして、もういきなり一緒にしました。初めての日、リアンはまさかこんな化け物みたいなのが出てくると思わないので、びっくりして逃げます。でも、ジャックにするともう何年ぶりの雌だみたいなことがあるので、必死になって追うんですけど、でも追い詰めることができないんですね。例えば追い詰められる環境だと、雄が自分の思いどおりにしようとするわけです。ところが、追い詰めることができなくてどうしたかということ、いじけたんですよ。そうすると、リアンはすごい気になるんですね、何でこの人いじけちゃってるの。それで一番自分が優位な場所から見ます。でも、いじけたということは、自分の思いどおりにじゃなくて、頭の中が変わったんですね。どうしたら自分を見てくれるだろうという気持ちに変わったということです。優しくなれたということだと思います。自分の思いどおりではなくて、どうやったら自分のほうを向いてくれるのかという気持ちになれた。こういうふうになるんだと本当にびっくりしました。

たまにちょっといらいらっとして暴れると、やっぱりリアンはびっくりして向こうへ渡っていなくなってしまうので、なりふり構わず地面にべったんこになります。べったんこになるとやっぱりすごい気になる。檻の隅っこでどうせおれなんかみたいな態度になると「あら、またこの人どうしちゃったの」。そうしたら、本当に吸い込まれるようにリアンが来ました。

僕らも中に入ると簡単に殺されちゃうので見るしかないんです。ここでリアンは恐る恐るさわって、ここからがすごかったんですけど、ジャックはちっちゃくなって、「いや、僕は何もしないよ」

たいな顔をして、これで肌と肌がちょっと触れて、本当に同居というんですか、ペアリングですね。最初の出会いが成功したんです。

今までは、こういう非常にリスクが高い組み合わせのとき何をするかということ、トランクライザー、精神医薬を使うんですね。個体同士の関係というよりも、それをごまかして一緒にしていこうと。そして、だんだん薬を抜くというやり方をするんですが、これは本来ではないですね。自分たちの気持ちとか感性の中で折り合いをつけていくというのではなくて、ごまかして一緒にしていくので、結局最後はうまくいかないんです。だんだん薬を抜いていっても、じゃあそこから本当の関係がつかれるかといったら、絶対そうはならない。

うちの動物園はホッキョクグマだとか、そういう本当に大事故につながりかねない動物でも、今は一切そういう薬を使わずに、本人の気持ちの中でちゃんと関係をつくらせるというやり方をしています。今は、小学校位の子どものときからそういう薬に頼ってみたいなのをよく聞くんですけど、これは本当にどうなっちゃうのかなと思うことが多いですね。

ちなみにこのペアリングのときに見ていて本当につくづく思ったのは、やっぱりこのジャックすげえなと思ったんですけど、やっぱり男は背中なんですね。背中に何か色々なものを背負っている。そこに何かふっと引き寄せられるような、そういう生き方をしなきゃいけないとつくづく思いました。さて、このとき何もしないよ

自分達の気持と感性の中で築く関係



リアンと赤ちゃん

みたいな顔をしていたんですけども、それがちゃんと2カ月後に交尾もできました。絶対できないと思っていたんです。こういうのって、20年間できなかったものが、自分たちの関係をつくる中でやっぱりできるようになるんですね。

次に出産になっていくんですが、チンパンジー、オランウータン、ゴリラになるとほとんど人と一緒です。例えば性周期28日ごとに排卵があって、途中生理がある。ただ、決定的に違うのは、子どもが生まれると排卵が止まります。その子が少し目を離しても一人で生活できる、自分のことは自分でできる位になるまで排卵が止まるんです。それが大体4歳、5歳位です。4歳位になったら次の排卵が始まって、交尾をして弟、妹が生まれるので、5、6年置きにしか子どもを生まないんです。だから、ある一定以上数が減るともう回復しないということになります。人間が子育てに一番時間をかけるとしたらとんでもないことかもしれないです。彼らの子育てを見ていると本当にすごいです。愛情というのは何だろう。見返りがあるものではなくて、注ぎ続けるものなんですね。一方的に注ぎ続けていって、命をつないで、動物はみんな命をつなぐということでエネルギーを使います。命をつないだら、もう自分は引いていくという、そういう生き方をみんなしています。

ただ、リアンは自分が弟、妹を見ない年齢のときうちの動物園に来てしまっていたんです。必ず1回は自分が育てられるのと、自分の弟、妹に関わるということがあって、初めて子育てはできるんだろうと。その弟、妹を見ていないので、子育てができるのかという心配をしていました。それに対応できるような飼育をしながらだったんですけども、出産を迎えました。

出産したときは、遠隔カメラで別の部屋からモニターしました。赤ちゃんがピーピー泣いています。リアンは、何か出てきたのはわかっているっぽいんですけども、「あら、私から何か出てきました」「これ何かピーピー言うんですけど、どうしたらいいん

ですか」みたいにうろちょろうろちょろしていたんです。でも最後やっぱりだめなんです。もう最後は袋にすっぽり入り、私無理ですということになりました。完全な引きこもり状態に入って、もう待てど暮らせど出なくなりました。このまま放置すれば当然赤ちゃんは死んでしまいます。一番簡単で安易な方法は人工保育という、人が育てるということです。このくらいの動物になると、育てることはそんなに難しくはないです。だけど、その赤ちゃんは人とコミュニケーションをとろうとします。人になろうとしてしまいます。でも、大きくなったら、僕らは一緒にいられないんです。大きくなって、じゃあおまえはオランウータンなんだからと言っても、今度はオランウータンとコミュニケーションがとれない。もう本当に孤独な50年、60年になるので、うちは人工保育はしないと決めていました。じゃあ何をしようと考えたかという、介添え保育ということを考えていました。

介添えとは何かというと、僕らは哺乳類です。哺乳類はおっぱいを飲んで育つ生き物なんです。だから、そのおっぱいを飲むということができるような、赤ちゃんをおっぱいに吸いつかせることができるような関係をつくっていきました。引きこもっていたリアンを袋から出して、赤ちゃんをおっぱいに吸いつける。チュッチュッチュッとするということですね。最初はとまどっています。何でこれ私にひつつけるんですかみたいな、もう目が上を見て、どうしていいのかわかりませんみたいな顔しているんですけど、おっぱいを吸われるというのは母性のスイッチですね。ほかの哺乳類でも、ここまでできると、かなりの確率でちゃんとお母さんになれるんです。スイッチが入ります。とまどっているんですけど、地面に置かなくなるんです。どうにか持っていようとするようになります。

やっぱり抱っこというのが基本なんですね。サル仲間だけが抱っこをして子育てをする生き物です。犬も猫も牛も抱っこはしないですね。もう絶妙にできていて、おしりにふっと手を添えて持つと、赤ちゃ

子育ては見返りを求めない愛

んの口が胸元に来て、吸いつけるという距離になるんです。常にお母さんの胸から景色や色々なものを見ながら、お母さんの体温を感じてずっと育っていく。それが基本です。

今、代用乳とか色々な便利なものがいっぱいできて、例えば赤ちゃんを連れて歩く時も、今はあんまり抱っこをして連れている人は少ないですね。乳母車に乗せるということが多いと思います。全然目線も変わってしまうし、本当は大変でも、やっぱり彼らの暮らしを見ていると、抱っこなんだなとすごく思います。

抱っこが基本で、育っていく中で今度離乳していくのですが、おっぱいだけではおなかいっぱいにならない。じゃあ、お母さんが、はい食べなさいとかみ砕いて与えてあげるのかということ、そんなことはしないんです。おいしいものは、母ちゃんは自分で食べるんです。ひたすら食べるんです。ただ、必ずひっついてる赤ちゃんは、見上げたらお母さんの顔が見えるんですね。お母ちゃん、何かうまそうなもの食ってるなとやっぱりわかるんですよ。どうするかと見ていると、その赤ちゃんはお母さんの口の中に強引に手を入れます。むにゅむにゅって手を入れます。そうしたら、お母さんが食べているものがつきましますよね。それをなめます。それがおふくろの味になっていくんですけど、生まれもっておいしい、まずいという味覚があるわけではないです。やっぱり生活している中で、その土地で暮らすこと、そこにあるものというのがおいしく感じる味覚が育っていくんですね。それがおふくろの味になっていって、例えばこのオランウータンなんかだと、7~9歳でひとり立ちをしてジャングルに出ていきます。ジャングルに出ていったら、もう何千種類の木の実がなっています。どれが毒なのか、どれがおいしいのかわからないですよ。何を頼りに生きるかというと、おふくろの味なんです。口にしておいしいものは食べる。おいしいと思わないものは食べない。それがもうそのまま生きる知恵につながって、引き継がれていくということだと思ふのです。

大切なおふくろの味

今の社会の中で確かに便利になって、どんどん楽になる仕組みがいっぱいできました。過程を省いて結果にすぐに結びついていくもの、例えばカップラーメンなんかは典型だと思います。そういう食べ物がかんたん増えてきて、都会の子どもたちのアンケートをテレビでやっていたのですが、お母さんたちが一生懸命つくった煮物と誰のためにつくったかわからないカップラーメンと、どっちがおいしいかという実験をして、かなりの子がカップラーメンのほうがおいしいとなりました。これすごく問題だと思います。そういう味覚が育ったということなんです。だから、本当は僕たちがつないでいかなければならないもの、すごく大切な絆の部分置き忘れてきている。その中で僕らが一方で便利になって、快適になって、だけどその結果が、もしかしたら生き物としてつないでいかなければならないものを本当に置き忘れたまま、だからこんな社会になっていっている。もしかしたら、色々なことでそんなことがあるのかもしれないと思います。

1頭目はモモというお姉ちゃん、後に事故で死んでしまいましたが、2頭目が生まれたときはちゃんと抱っこできました。お姉ちゃんのほうは、もう本当に生まれるところからずっと見ていましたね、出てくる場所から。でも、これ何、あれ何みたいに興味津々で、お姉ちゃんのほうは雌だったので、多分この1回の出産を見てお母さんになっていくんですね。

動物たちの暮らしの中では、生まれること、死ぬことというのは特別なことではないです。本当に日常です。生まれること、死ぬこと、命をつなぐことというのは、一番日常でなければいけないことですね。それが僕らの中では、「命は大切」という言葉の中で見えないものにどんどんなっていって、出産すら高度医療みたいな話になってくる。特別なことになってしまっていて、例えば子どもに「死って何」と聞くと、ほとんどの子が「病気」と答えます。病気じゃないですね。いくら治療を続けたって必ず死は来るわけで、たまたま病気が原因だけで、「命は

大切」は「どう生きるか」なんだなとつくづく思います。彼らの暮らしを見ていたら日常なんだ、でもそれをちゃんと見て自分のものにしていくことが一番大切なんだなと思います。

お姉ちゃんが弟を子守しているときは本当にすごいですよ。弟が自分で行くのじゃないんです。お母さんが手をとって、お姉ちゃんに預けるんです。見てなさいとやるんです。男の子、女の子は遊び方が違うみたいに、やっぱり雌のほうはままご的なことが好きです。でもすごい幸せなので、お姉ちゃんにしたら弟を抱っこさせてもらえるなんてみたい。ただ、やっぱりチビなので飽きるんです。飽きるとどうするかというと、これも偉いんですけども、飽きたから置くということは絶対しない。お母さんに返しに行くんです。でも、お母ちゃんも楽しみたいので、何か変に鬼ごっこみたいなことになっていましたが、それはそれは細やかです。最初抱っこすらできなかったリアンが、ちゃんとこういうふうに自分の子どもを見続けることで、お母さんになっていくのです。旭山動物園は行動展示と言われるんですけど、僕は営みだと思っていて、見続けてもらうことが、命というものが何なのか感じてもらえる原点なのかなと思ったりします。

綱を渡る練習をしているときもお母さんが一緒です。すごい見事です。絶対に落ちないように2週間、3週間繰り返して、だんだん一歩ずつお母さんが後に行くんです。一瞬だけは子どもがぶら下がるみたいに、もう本当に細やかにこういう練習を続けながら、子どもたちが成長していきます。

途中から子育てをしなくなるという育児放棄が動物園でもあって、問題になることがあります。僕らの社会でも多いと思いますが、どういうときに起きやすいかというと、安全を保障したときに起きやすいんです。例えばチンパンジーは群れで生活しています。順位があるのです。雌の中にも順位があって、順位の低い雌の子育ては、僕らから見ると何かちょっとかわいそうなんです。食べ物を食べるのもちゃんと食べられなかったりするので、そうなったらその親子だけを安心できるように、特区環

境にあって別室に移します。そして子育てをさせてあげようと思うんですが、そうするとどうなるかというと、それまでは絶対に抱っこして食べていたものが、ふと子どもを置くんです。子どもを置いて餌を食べるということを始めます。要するに安全だからなのですね、だんだんその時間が長くなって、あるとき突然それまでできてきた関係がぶつんと切れてしまうということが起きます。

うちの動物園のオランウータンの環境は大人のスパンに合わせてつくっています。色々な腕渡りの感覚だとか、大人には安心なんです。でも、リアンにしてみると子どもに対しては危険がいっぱいのところだから、結果として子どもを見続けるんです。ほかの子との比較ではなくて、自分の子がこれまでできる、こういうことができるというのをずっと見続けているから親子の絆ができていくのだろうなと思います。

今、安全とか安心とかが権利のように保障されているので、自分で見つけられない。本当は安全というのは自分で見つけるもので、危険というのも自分で察知するものでなければいけなくて、それを誰かのせいにはできないのであれば、もう遊園地から遊具はなくなるしかないんです。でも、その環境というのを考えたときに、じゃあそれが子どもらしく過ごせる環境なのかということ違いますよね。明らかにうちのつまらなかったときの動物園みたいに檻の中に動物がいるだけみたい、何も事故は起きない空間になっていくんです。だから、本当に僕たちがつないでいくこと、営みって何なのかと、そん



なことを思ったりします。

生まれたら死にますよというあたり前のことが、今あたり前になかなか感じられない。動物園でも命は終わるのですけれども、本当は人以外の生き物は、食物連鎖という食べる食べられるの関係が輪になって、全部が輪になって閉じていますよという関係の中で生きています。食べる、食べられるとは何かというと、殺す、殺されるの連鎖なんです。だから、自然の生き物に対して助け続けたら、命はつながらないです。

エゾリスは、野生だと3、4年が平均寿命と言われています。うちの動物園で一番長生きしたエゾリスが16年生きています。だから、16年が生物学的には寿命。今の現代人の平均寿命に近いのかもしれないですね。でも、いい悪いではなくて、何かのハンディがあったり、何かの油断があったり、何かの能力の衰えがあったら、次の命に引き継がれていきますよというのが本当は生き方。だけど、動物園はその輪から動物を引き抜いてくるので、終われない命になってしまいます。だけど終わりは来るんですよね。その終わりを僕はもう迎えさせてあげるかというのを本当に考えていきます。

上川のベアーセンターからうちに来たカンゾウというホッキョククマが、当時日本で飼育しているクマで最高齢のクマでした。血液検査をしたら、肝臓が悪かったのでカンゾウという名前になりました。

安全と食べ物が保障されているので、よばよばになっても生きています。ある日泳いでいて、プールから出たんですけれども、プール一面にもう白い米粒みたいなのが浮いて、何だろうと思ったらウジだったんです。よく見るともうカンゾウの爪の間とかにびっちりウジが刺さっていて、プチプチプチみたい音がしていました。要するに老廃物がもう腐敗している状況なんですね。ああこれはと思って見たら、肝臓の機能も衰えていたんですけれども、腎不全寸前になっていました。

どう生きるかは、どう飼育するか、どう死を迎えさせてあげるか。肉食動物として、ホッキョクグマとして、カンゾウとして一生を過ごさせてあげて、

どういう終わり方をするかで決まるような気がしていて、そのときに僕らの中では、尊厳とか生活の質とか色々なことを考えた中で、終わらせてあげるという感覚を持ちます。要するに安楽死なんですね。それを選択肢に入れながら命を見ていきます。

カンゾウのときは自然死だったんですけど、死期が近づいた時はもう耳も聞こえない、目も見えないんですけど、人の来た気配は感じるので、扉が開くと出るんですね。もうこんなになっても出せと。でも、生きてるといのは理屈じゃないし、医学じゃないし、科学じゃないし、やっぱり生きているという命なんですね。本当にそれがすごくて、でも必ず死は来て、だから今お孫さんがいたりとかお子さんがいたりとかであれば、もし命を飼ったら、それはどこかで終わらせるのではなくて、やっぱりちゃんと看取ってあげなければいけないものなんだと思います。生きているうちは存在としてあるんですね。心の中でその命が生き始めるのは死んでからですね。でも、その心で生き始める原点の最低条件は、やっぱりその死を自分で受け止めるということだと思うんです。今はそれがどんどんどんどんなくなってしまっている。だから、心の中で生きている生き物がほとんどいなくなってしまっている。だから優しくなれない、何かどこかで踏ん張りがきかなくなっていくような気がします。

いま一度豊かさとか色々なものを、何かもう一回感じて、理屈ではないところで豊かさを感じたり、命をつなぐということを考えなければいけないのではないのかなと思っています。

座長・三浦哲嗣先生（札幌医科大学医学部内科学第二講座教授）

25年以上獣医或いは動物園のスタッフとして命を見つめてきた経験からの大変感銘深いお話でした。

たくさんのスライドを見せて頂きましたが、長年動物に愛情を注いできた坂東さんには我々には読み取れない多くのことが見え、理解できるのだと感銘いたしました。

私達人間同士もお互いにもう少しよく見て、良く聞いて理解を深めることが大事なのだということも教えていただいたような気がいたします。

講演 あたり前の暮らしを求めて 倉本 聰氏 脚本家、演出家、劇作家

市民フォーラムの講演第二部では脚本家、演出家、劇作家として活躍中の倉本聰氏が、「あたり前の暮らしを求めて」と題して講演し、複雑化・高度化した現代の社会を見つめ直す必要性を説かれました。

倉本聰氏は、我々が生きていく上で大事な酸素と水を生んでくれる森をどんどん伐採し、また、都市はアスファルトで固めて、文明社会は不毛の地をどんどん広げる方向に進んでいると語り始めました。

★

戦後我々は壊れたら捨て、新しいものをどんどん消費するという社会になりました。そのようにして日本は経済大国になりましたが、ブレーキをかける或いは少し後戻りをするという視点が欠けているというのが今までだったと語ります。

★

戦前にあった生きるということ、或いは日本人としての暮らし方といったものへの座標軸を見失ってしまったという不安感を持っていたと言います。そこで富良野へ移住し、他のエネルギーに頼らずに、出来る限り自分の中で出来る生活へとシフトしてみたのです。勿論そんなにうまくいくわけがありませんが、その中でもしそういうことができる人間がいたらどうなるだろうと考えたドラマが「北の国から」というドラマなのだそうです。一番我々が根源的に

忘れていた事を書きたかったのです。

★

暗くなったら寝るという根源的な事を忘れ、今は深夜まで起きて活動していることからエネルギーを消費しているわけです。われわれ自身が生活をどんどん拡大

してしまっただけで大きな問題があるのではないかと問いかけました。

★

私達はこれからも電気・石油に依存した贅沢な暮らしを続けるのか、貧しくても原発のなかった時代に戻す覚悟があるのかという岐路に立っている。今の常識であたり前を考えてはいけなく、本来の座標軸に戻ってものを考えないといけなくと訴え、会場を埋めた聴衆は深く頷いていました。

★

座長・筒井裕之先生（北海道大学大学院医学研究科循環病態内科学教授）

「あたり前の暮らしを求めて」というタイトルでご講演頂きましたが、我々が日常の生活の中で、どういうものに価値を見い出して、そしてどういう風に生きていきたいのかということも含めてをお話しいただきました。

1977年から富良野に在住され、様々な活動をされてきた倉本聰さんのお話は、大変楽しくもあり、考えさせられることも多かったように思います。

今後ますますのご活躍を期待いたします。



質問・討論コーナー「北の国から元気を出す工夫」

坂東 元氏、倉本 聰氏 進行：長谷部 直幸氏 旭川医科大学内科学講座
循環・呼吸・神経病態内科学分野教授

長谷部氏（以下長谷部） 講演で、坂東さんには命の営みのすばらしさというお話をいただきましたし、倉本さんには文明に頼りきった暮らしの危うさを教えていただきまして、お二人とも期待どおり、本当に心揺さぶるご講演だったと思います。皆様からいただきましたご質問、ご意見とお二人のご講演を踏まえまして、少しお話を伺わせていただこうと思っております。



北海道心臓協会も30周年ですが、我が国のテレビドラマ史上に残る最高傑作「北の国から」も放送開始30周年ということ。数々の名場面があったドラマ「北の国から」ですが、泥のついた1万円のピン札の場面というのが、皆さんからベストシーンとして最も支持されたそうです。倉本さんはこのシーンがベストだと皆さんに支持された理由はどの辺にあるとお考えでしょうか。

倉本氏（以下倉本） あれは自分の経験からなんです。戦後おやじが死んで、おふくろが金がないはずなのに無理してどこからひねり出して、500円札を僕にくれたんです。その500円札がどうしても使えなかったんですよ。その後、僕は稼ぎ出して、ほかの500円札は使えるんだけど。500円札というのが500円の価値というものではない別の意味合いを持っている。つまりお札って、確かに価値で言えば1万円は1万円なんですけれども、そこに渡された人の思いとか受け取ったときの感情とか、そういう物語が加わるという気がするんですね。それを貨幣価値だけで考えることはどうかと僕は思っています。



長谷部 坂東さんもこの「北の国から」のファンであったと聞いていますが、どんなシーンが思い出に

残っていますか。

坂東氏（以下坂東） 子どもたちが、電気もない何もないところでどうやって暮らすのという、最初のほうの富良野で暮らし始める部分がすごく何か印象にありますね。



長谷部 僕はやっぱり月並みですけど、螢ちゃんがお母さんの電車を追いかけるシーンです。お父さんのことを思っているから、妙に冷たくしているわけですね。だけど、お母さんが離れていくというときにもう泣きながら追いかけるという、何というか、お父さんの気持ちを思いやりながら、お母さんも慕っているといういじらしさに泣きました。

動物園の動物たちというのも、人間に気を使うような感情を示すことはないでしょうかという質問がきています。夏の暑い日に旭山動物園に行かれた方の感想で、オランウータンのジャックがもぐもぐタイムのときに綱渡りをして見せてくれたそうです。暑いから動きたくないときに、決して道路の反対側にある餌を食べたいから行ったのじゃなくて、来園した人を期待どおりにやってあげなければとでも考えているんじゃないかと、その方は思ったということなんです。動物園の動物が人間の期待に配慮して行動することがあるかということですが、坂東さんいかがでしょうか。

坂東 期待に応じてというわけではないんですけど、特にジャックくらいになると、人が何を考えているか。感覚の中で全部わかっていますから、多分そのときは何かきつと温かく見守っている人たちだったのでしょね。気まぐれで、渡らないったらもう渡らないんですけど、人がどういう反応をするのかというのは楽しんでますね。

別にもぐもぐタイムじゃなくても渡っているんですが、人間って上を見たら、みんな口がぽかんとあ

くんですよ。彼らなりの時間の中でお客さんを見ながら、楽しんで反応したりしているのかなとは思いますがね。

長谷部 やっぱりそういう要素はあるんだということですね。

「北の国から」では、ストーリーのエピソードとして出てくる動物はあまりなかったように思いますが、一つ印象に残っているのが、農耕馬のドサンコの話です。無用の長物と化したドサンコが、たしか吹雪の中で、ブルドーザーでも除雪車でも捜しきれなかった人を捜し当てるといった感動的な場面。デジタルにアナログが勝ったみたいな、行き過ぎた文明に対する強烈なアンチテーゼと云いますか批判といった要素が多分あるんだと思うんですけど、このシーンはどういうことを意図してでき上がったんでしょうか。

倉本 これは、僕が富良野で農家の青年から聞いた話のもとになっているんです。農家ではほとんどが農耕馬を飼っていたわけですね。曲り家（まがりや）で一緒に住んでいますから、家族

みたいになるんだそうです。ただ、絶対名前はつけなかったそうです。なぜかというと、冬苦しくなると売っちゃうから、そのときに情が移っちゃいけないというので、絶対に飼馬には名前をつけないという不文律があったみたいですね。それで、そのうちブルドーザーが入るようになって必要なくなったのだけど、放せなくてしばらく置いていたんだそうです。でも、もうこれは売ろうということになったのだけれど、馬は今売るとすぐにドッグフードになっちゃうわけですよ。それでかわいそうで、前日にごちそうしたんだそうです。そうしたら馬がやっぱり察したらしいんですね。それでトラックが迎えに来たんだけど、馬小屋から出したけど動かなくなっちゃって、主人へ顔をこすりつけるんだそうです。見たら大粒の涙を流していたというんですよ。

それで一家全員ぐっときちゃって、どうしようと思ったら、今度は馬がぱっと首を離して、すたすたと自分から踏み板に乗って、トラックに乗っていったというんですね。その話がものすごく印象に残って、それをちょっとこういう形で脚色したんです。

長谷部 倉本さんに対するご質問の中で、動物と人間とどちらがお好きですかというのがあるのですが。

倉本 人間の場合、雄と雌とで相当違いがあるというような気がしますが（笑）。昨日うちの犬に頭突きされてけがしちゃったんだけど、動物のほうがいいですね、人間はいろいろ言いますし。

長谷部 倉本さんのドラマの中では人間のエピソードがあまりにすばらしくて、動物のエピソードを持ち込む必要がないのではないですか。

倉本 テレビドラマ界では、動物を持ち込むのはひきょうだと言われているんですよ、動物と子どもは。「北の国から」はもうさんざん子どもを使っちゃったんで。

長谷部 走っていますよね。子どもたちがいつも走っているという。

倉本 まあ演技ができないから走らせるんです。（笑）

長谷部 坂東さんにこの質問ってどうなんでしょう。人間と動物とどちらが好きですか。

坂東 自分はやっぱり動物のほうが好きなんですけれども、人間は別に嫌いというわけでもないですが。人間がつくり出したもので人以外に役に立ったものって、今までないじゃないですか。結局僕らが文明だ何だかんだ言ってつくってきたものは、何も人以外のものに返していないというのが、何かちょっとそこら辺のわがままさが許せないなみたいな、そんな気がして仕方がないですね。

長谷部 やっぱり動物の側に立った視点でのお考えですね。

倉本さんの「あたり前の暮らしを求めて」というお話がありまして、我々は文明に頼り過ぎた暮らし



左から坂東氏、倉本氏、長谷部氏

ぶりというものを反省せねばならんというお話だったと思うんですけど、それに関して色々な質問の中に「あたり前の暮らしの最低基準というのはどこに置いていますか」と。それからもっと鋭いのがありまして、「倉本さんご自身の暮らしぶりはあたり前の暮らしなのでしょうか」という質問です。

倉本 僕はあたり前の暮らしをしていますよ。本能に赴いてやりたいことをやっていますから、まずそのことがあたり前だと思いますね。それから、富良野に住んでからもう35年、新聞はとっていませんし、もちろんパソコンみたいなのはできません。最近やっとみんなに言われて携帯のメールというのが打てるようになりました。車はもちろん移動手段としてどうしても必要ですし、飛行機がないと東京に行けないから使います。文明をすべて拒否するなんていうことは絶対にあり得ないと思います。ただ、できる範囲内で自分の削れるものを削っていくということなんじゃないですかね。

長谷部 ご質問の中に、「エゾシカが五十数万頭に増えちゃったので、それを駆除して食用にする話が出ています。昔は北海道にもオオカミが住んでいて、自然に淘汰されていたのを、人が勝手にオオカミを駆逐したので、生態系がアンバランスになっただけなんじゃないかと。」だから、我々は原点に立ち返って、もっと動物と共存するということを考えるべきじゃないか。人間の傲慢さを反省すべきではというご意見なんですけど、坂東さんはいかがでしょう。

坂東 動物園もしょせん人のエゴでつくった場所に生き物を閉じ込めているという部分では、動物園の動物が幸せというのはどこかごまかしがあるんですね。オオカミとエゾシカに関しては、例えば今、オオカミ再導入みたいな話がよくあるんですけども、生き物ってバランスですよ。増え過ぎてしまって、オオカミを入れてエゾシカが減るのであれば、それもまた逆にバランスを崩すことになるので、そんな簡単な話ではないだろうという気がまず一点するんですね。シカが暮らしやすい環境をどんどん僕らがつくっていつているので、増やしました、邪魔だから殺しましたという、その感覚はちょっとおかし

いだろうなと思うんです。

僕は不都合なもの存在を認めないという生き方をしているけど、動物たちは、次の瞬間に後ろを振り向いたら、タカに自分が食われているかもしれないという瞬間瞬間の中で生きている。けど動物たちは相手の存在を否定しないですね。自分を食べるものの存在を否定しないで認めるんですね。そこが僕らが忘れちゃった感覚です。

よく旭山動物園でオオカミとエゾシカが隣同士にいて、エゾシカがかわいそうって言われるんですよ。けど、彼らは柵が1枚あることで来られないのは、すぐに感覚の中でとらえます。さらに、自分にとって不愉快なものでも、存在というのを否定しない生き方をするので、僕らが思うような感覚で彼らは隣同士にいるわけではないんですね。そのたくましさみたいなのはありますね。

長谷部 さてここで、倉本さんに大ファンのゆえという但し書きがついていましたご質問です。お兄さんを肺気腫、肺がんで亡くされた女性からの質問、「倉本さんはたばこを吸われているので大変心配しています。たばこの害を痛感しています。たばこはやめられないのでしょうか」という温かいお叱りの言葉なんですけれども、いかがでしょうか。

倉本 僕はやめません。今、僕にとって一番体に悪いのは「禁煙」という文字です(笑)。あの文字を見るたびにストレスが起こって血圧が上がります。これは本当に体に悪いです。流煙が嫌だということをよく人は言いますが、そう思って僕は人に会わないようにしています。できるだけ人前に出ません。



僕は60年間たばこを吸っています。吸いながら物を書く習慣という回路ができちゃっているんですね。だから、こうやっていないと物が考えられない。やめろと言ったってそれは無理だし、それから皆さんの健康のためにみたいな、この間の厚労省のああいふのは本当に余計なお世話ですね。(笑)

長谷部 倉本さんには、僕も医師という立場で、やっぱりやめたほうがいいですということはいつも申し上げるんですけども、もうその都度へ理屈を言うんですよ。

倉本 へ理屈じゃないよ。「北の国から」というのは、僕、46万本のマイルドラークと1400本のジャックダニエルによってあれは書き上げたんです。それがなかったら書いてないんです。(拍手)

長谷部 いや、皆さんの共感を呼んでいるようですね。医師としては一応言うんですけども、倉本さんの場合、これで創作活動ができないと言われてたら、これはもう大きな文化的損失なので、僕は、はっきり言ってもうあきらめています。たばこというのは絶対に健康に悪い、そんなことは百も承知だ、でも元気にはいいんだというふうにおっしゃるので。

倉本 そうですね。僕は健康と元気は別のものだと思っていますから。

長谷部 坂東さんは黙っていますけど、実はすごいヘビースモーカーなんですよ。やめようとされたことはないですか。

坂東 やっぱり無理ですね。ただ、今話を聞いてすごい説得力あるなと思いました。いや本当に。

長谷部 動物たちはたばこを嫌がるということはないんですか。

坂東 それはそんなになくて、よく問題になりますが、例えばチンパンジーとか、教えるのではなく、吸いかけをぱっと投げていると、まねをして吸い始めて、完全に習慣になっていきますね。何か精神的

な部分での安らぎだったりとか、色々な効果はあるんだと思いますよ。いや、僕本当に思うんですけど、東京にいたら、東京の空気を吸っているほうが悪いだろうと思うんですよ。

倉本 そうです。本当にそうです。

坂東 JRも東海に行くと、喫煙車両があるんですよ。関東から北がなくなるので、いくら新幹線便利になったって、絶対に新幹線には乗らないです。そういう人が沢山いるんじゃないのかと思いますけど。

長谷部 ヘビースモーカー二人がここにおいて、2対1でやりますからなかなかつらいですけども、しかし私、立場的にはやはり言わなきゃいけないので、TVだったらスクリーンの下のところに、「ごらんの皆様は決してまねをしないように」というテロップが出ると思うんですね。一応これはそのよう

にお願いはしておきたい。ただ、何を隠そう、私も昔1日60本ぐらい吸っていたヘビースモーカーでしたがやめたんです。

倉本 意志が弱いんです。

長谷部 いやいや(笑)。やめられなかったときはそう思っていました。ただ、

本当に苦労してやめたんですけども、やめてみて気がつく現実というのがあって、そのときにつくった川柳なんですけども、「やめてなお、妻は私を煙たがる」という。(笑・拍手)

たばこの話だけでずっといってしまいそうですのでこの辺にしておきまして、「北の国から元気を出す工夫」という企画ですので、ますます我々元気をもらわなければいけないということで、旭山動物園のこれからの企画とか何か予定されていること、あるいはさらなる夢などをぜひお聞きしたいと思います。

坂東 色々な生き物と生きることとか、ふと風景の中に生き物がいることが、何かすごく豊かに感じたり幸せに感じられれば、きっと色々な仕組みが変わると思うんですね。そんなことにつながる動物園になっていきたいというのが一番思うことです。



クマの問題も僕は犬の放し飼いをやめたのが根本だと思っんです。ワンワンワンワン犬がいたら、クマはそれ以上来ていないですよ。動物たちは人という生き物を見ているから、引いたら出てくるし、こっちが少し強く出れば、これ以上だめなんだと彼らは引いてくれるんです。

そういうことにつながるような、何か活動というか動物園でありたいという、これからそこに向かっていきたいなと思っています。

長谷部 それでは、最後にということで、倉本さんに質問なんですが、次回作の構想はどのようなものでしょうか、お聞かせください。

倉本 たばこが吸えるという前提ですけれども、今実はもうほとんど撮影されて、1月1日に放送する作品があるんです。19年前に書いた作品で、少年がコンピューターをガチャガチャにされたために殺人を犯しちゃって、それで口を聞かなくなってしまいます。じいさんがその子を持ってカナダのロッキーの上へヘリコプターで降りて、そこから下りてくる途中で、全く口を聞かない無反応な少年を一人置いて自殺しちゃうんです。で、その少年が一人でサバイバルするという話なんです。この中にグリズリーやブラックベアが出てくるんですよ。

札幌でもクマが出ているという話がありますが、僕のところはしょっちゅう出るんですけど、こちらが興味を持たないと向こうは興味を持ちません。関心を持ったなら、向こうも関心を持ちます。人と話していたら、そいつの後ろに出てきたんで、「おい、後ろにクマいるぞ」と言ったら「どうしよう」と言うから、「そのままおれと話し続けろ」と言ったら、クマものそのそのそのそ動いて、向こうで木に登ったりして遊んでいましたけど。

さっきのたばこの話の続きですけど、自分でも本当に少し減らしたいという気はあるんで一つ方法を思いついたんです。起きてなきゃいいんだと。そ

れで寝る時間を増やしたんですよ。だめですね。12時間寝ていると脳の中にCO₂が多くなっちゃうのか、一日中眠いですね。何にもできないですね。冬眠というのはできないんですか。

長谷部 人間がですか。

倉本 ええ。これ動物はどうなっているんですか。あそこでは冬眠させないんですか。

坂東 動物園では生理機能上、冬眠しなければいけないんですけども、でも人間も何か難病になった人をとりあえずみたいな技術を開発をしようとはしていますよね。

長谷部 モルモットがいますよね。あれを超低温にさらすと自然に冬眠します。そして冬眠すると、心臓はほとんど止まったような状態になるんです。血圧ももちろんないですし、つまりほとんど死んでい

るような状態で寝ているんですけども、暖めるとちゃんと起きてくるんです。

倉本 いいじゃないですか。その間、僕はたばこ吸わないですむわけですから。循環器としては、そういうところへどうして医学を進めないですかね。

長谷部 そうですね。それは、でも人間のやることかと言われると、僕はやっぱり寂しいですね。

倉本 いや、寂しいって、吸えないほうがよっぽど寂しいですよ。(笑)

長谷部 僕はもう止めません(笑)。もう自己責任でやっていただくしかないですからね。そのためにどうかなっても、決して僕を訴えることはしないということですよ。

倉本 訴えません、訴えません。確信犯ですから。

長谷部 こういう話をしていると、いくらでも時間がたっていきそうなんですけれども、今日お二人のお話を伺えたということが、元気を出す一番の素になったんじゃないかと思います。

本日は本当にありがとうございました。



健康講座・料理実習開催される

DASH食にチャレンジ! ～高血圧を予防して心機能を強化～

北海道心臓協会と北海道新聞社が主催する健康講座・料理実習が9月3日(土)札幌市南区真駒内の光塩学園女子短期大学で開催されました。

「DASH食にチャレンジ!～高血圧を予防して心機能を強化～」をテーマに29名が参加しました。講師は同短大食物栄養科の教授・藤本真奈美氏、助教・佐藤恵氏、アシスタント・佐藤はるか氏ら。

はじめに藤本真奈美、佐藤恵両先生からレシピの紹介、作り方の要領などのレクチャーを受けました。DASH(ダッシュ)食は「高血圧を防ぐ食事方法」と訳され、積極的に摂取したい栄養素として、カリウム、カルシウム、マグネシウム、食物繊維、たんぱく質の5種類を挙げ、脂肪分が多い肉やコレステロールが多い食品を減らしたいと説明がありました。その後、お茶ご飯、枝豆しんじょうのお吸い物、さ

<献立>

お茶ご飯
枝豆しんじょうのお吸い物
さんまの梅煮
きのこの養老蒸し
かぼちゃまんじゅう
日本茶



んまの梅煮、きのこの養老蒸し、かぼちゃまんじゅう、のメニューに挑戦しました。

お昼には皆さん和気藹々となごやかな楽しい食事となり、出来上がった料理に舌づつみをうちました。

レシピのご紹介

お茶ごはん 材料5人分

米……………1と3/4カップ	} 合わせて 2カップ	だし昆布……………5cm
押し麦……………1/4カップ		(塩……………小さじ1/4)*お好みで
水……………440ml		新茶……………小さじ1

- ①米はといで、一割増の水(塩)、だし昆布を加えて炊飯します。
- ②鍋で新茶を香りが立つまで弱火で炒ります。
- ③炊き上がったご飯に②の新茶を混ぜて蒸らします。



枝豆しんじょうのお吸い物 材料5人分

豆腐……………1/2丁	乾燥わかめ……………小さじ2
砂糖……………小さじ1	人参(型抜き)……………3cm
塩……………ひとつまみ	柚子の皮……………少々
卵……………1/2個	かつお昆布だし汁……………500ml
片栗粉……………大さじ1	醤油……………小さじ1/2(3g)
枝豆……………50g	塩……………小さじ1/2

※ラップ、輪ゴムを使用

- ①豆腐は水切りしておきます。
- ②枝豆は茹で、豆をさやからはずしておきます。
- ③すり鉢に①の豆腐を入れてすり、砂糖、塩、卵を加えて滑らかにすり、片栗粉を加えて混ぜ、枝豆を加えます。
- ④ラップに③の種をスプーンでのせ、ラップを茶巾に絞って輪ゴムでとめ、湯呑に入れて蒸し器で10分蒸します。
- ⑤人参は型で抜いて下茹でし、わかめは戻しておきます。
- ⑥だし汁に醤油、塩で調味し吸汁を作ります。
- ⑦お椀に④の枝豆しんじょう、人参、わかめを盛り、柚子の皮をのせ、吸汁を注ぎます。



さんまの梅煮 材料さんま5尾分

さんま	5尾	水	400ml
塩	適量	酒	大さじ2
昆布	10~15cm	砂糖	大さじ3弱
梅干し	小5個	醤油	大さじ3弱
さやいんげん	5本	みりん	大さじ1強



- ①さんまは頭と尾、内臓を取り、2~3等分に切り、塩をふって熱湯をかけておきます。
- ②鍋に5cmに切った昆布を入れ、水を加え、火にかけます。酒、砂糖、醤油、梅干しとさんまを入れ、落としぶたをして弱火で煮ます。
- ③5、6分後、みりんを加え、煮詰めます。
- ④器にさんまを盛りつけ、一緒に煮た梅干しを添えます。

きのこの養老蒸し 材料5人分

干し椎茸	2枚	水溶き片栗粉	適量
しめじ	1/2パック	長いも	200g
えのき茸	1/2パック	三つ葉	少々
なめこ	1/2パック	柚子の皮	少々
		わさび	適量



だし汁	2カップ	※椎茸の戻し汁+昆布だし	
酒	大さじ1	みりん	大さじ1
醤油	大さじ1	塩	少々

- ①干し椎茸を戻して薄切りにし、しめじはさいて半分に切り、えのき茸は半分に切ってほぐしておきます。
- ②鍋に、分量のだし汁を入れ、調味料と①のきのこを入れて火にかけてきのこを煮ます。
- ③長いもは皮をむいてすりおろします。
- ④器に②のきのここと煮汁の半量を入れ、③の長いもをかけ、蒸し器で3分程蒸します。
- ⑤残りの煮汁を鍋に入れ、水溶き片栗粉でとろみをつけてあんを作ります。
- ⑥三つ葉は1cmくらいに切り、柚子の皮は千切りにしておきます。
- ⑦蒸し上がった④に⑤のあんをかけ、三つ葉、柚子の皮を天盛りにし、お好みでわさびを添えます。

かぼちゃまんじゅう 材料5~6個分

～生地～		～かぼちゃあん～(目安：1個10g)	
水	20ml	かぼちゃ(皮なし)	60g
砂糖	30g	砂糖	12g
ベーキングパウダー	1.5g	塩	0.2g
薄力粉	50g	すりごま	1g
かぼちゃパウダー	2.5g	いりごま	1g
薄力粉(とり粉)	適量		



- ①ボールに砂糖、ベーキングパウダー、かぼちゃパウダーは色を見ながら入れて混ぜ、分量の水を加え、木べらでよく混ぜます。
- ②①に薄力粉を加え、粘りを出さないように、木べらでさっくり混ぜあわせませす。(かたければ水、軟らかければ薄力粉、砂糖を分量の割合で適量加えます。)
- ③②をとり粉の入ったバットに移して4~5回、四方から折りたたみます。
- ④③を6等分に分け、丸めて平らにし、かぼちゃあんを包みます。
- ⑤蒸し器に入れ、約13~14分蒸します。(下にまんじゅうの大ききのクッキングシートを敷く)

～かぼちゃあん～

- ①かぼちゃの種と皮の部分を取り除いて、適当な大きさに切り、蒸し器で約5~10分蒸します。
- ②①のかぼちゃをボールに入れ、マッシャーなどでつぶし、砂糖、塩、すりごま、いりごまを加えて混ぜます。

第56回日本透析医学会学術集会・総会参加報告

特定医療法人 北海道循環器病院
薬剤科 信太 寛和



平成23年6月17日から19日の3日間の日程で第56回日本透析医学会学術集会・総会が神奈川県のパシフィコ横浜で開催されました。本学会は腎臓・

透析学を志す医師、薬剤師、看護師、臨床工学士など数多くのスタッフが集い、基礎から臨床までの幅広い優れた教育・研修の機会を提供すると同時に、最先端の研究成果を発表・討議する場として全国からたくさんの参加者を集めて毎年開催されています。

今回、私は「当院の慢性透析患者におけるHb管理のための要因解析」という演題で発表させていただきました。

腎性貧血は腎機能障害によりエリスロポエチンの産生が低下し、Hb値を基準値に維持できなくなった状態で、透析患者の合併症における課題の一つとなっています。遺伝子組み換えヒトエリスロポエチン製剤（rHuEPO）で治療することにより、透析患者の貧血はある程度改善します。しかし、rHuEPOで治療を受けている患者の15～20%に貧血の改善効果の乏しい症例がみられることがあり、その要因として鉄欠乏状態、出血、感染症、炎症、悪性腫瘍、葉酸・ビタミンB₁₂欠乏、高度の副甲状腺機能亢進症、不十分な透析、尿毒症物質の貯留、低栄養、ビタミンC欠乏などが関連していることが知られています。

本研究では当院の慢性透析患者のHb管理に、従来から知られている要因が関連しているのか。また、その他に関連する要因があるのかということを検討しました。結果として従来から知られている透析効率や透析時間、栄養状態を良好に保つことが当院の慢性透析患者のHb管理に重要であることが再確認できました。さらに、血清Mg濃度がHb管理に影響を与える可能性が示唆され、今後の研究課題となり

ました。本研究の結果を踏まえ、当院における医師とコメディカルによるカンファレンスを活用し、慢性透析患者のHb管理をより良いものにしていくことができると考えています。

また、今回の学会では本年秋に改訂予定の慢性腎臓病にともなう骨ミネラル代謝異常（CKD-MBD）の診療ガイドラインの改定案が提示されました。リン、カルシウムの管理の項目では、2006年発行の前回ガイドライン以降に登場した薬剤であるシナカルセトや炭酸ランタンなどの使い方を加えた新しい9分割図を盛り込み、さらに対象とする病態を二次性副甲状腺機能亢進症以外にも広げるなど、臨床に役立つガイドラインを期待させるものとなりました。新規検討項目としては、リンやカルシウムなどの管理目標値の再検討、新しい薬の位置づけ、血管石灰化の評価、骨の評価があり、保存期さらには小児患者も検討課題としおり、当院でもガイドライン改訂を見据えて透析患者の治療を進めていきたいと思えます。

その他にもたくさんのシンポジウム、口演があり、多くの事を勉強させていただきました。今回の学会に参加した経験を励みとし、日々の業務の中で少しでも還元できるように努力していきたいと思えます。

最後に、本学会への参加にあたり研究開発調査助成を賜りました財団法人北海道心臓協会に心より厚く御礼申し上げます。

北海道心臓協会のご案内とお願い

財団法人北海道心臓協会は予防啓発や研究、調査に対する研究助成などの活動を通して、心臓血管病の予防、制圧に努めています。本協会は1981年に創設され、一貫して皆様の賛助会費やご寄付により運営されています。ご協力をお願いします。何口でも結構です

賛助会費（年額）	一般会員〈1口〉	1,000円
	個人会員〈1口〉	3,000円
	法人会員〈1口〉	10,000円

第17回日本心臓リハビリテーション学会参加報告

JR札幌病院 リハビリテーション室
理学療法士 近藤 淳



7月に大阪国際会議場にて行われた第17回日本心臓リハビリテーション学会に参加しました。「心血管治療としての心臓リハビリテーション」をメ

インテーマとして、講演・演題数が400を超え、医師・看護師・理学療法士・作業療法士・臨床検査技師・薬剤師・管理栄養士・健康運動指導士など多職種間での意見交換が行われました。

心臓リハビリテーションは、早期離床をめざす短期的介入の時代から、現在では慢性心不全を含む心血管疾患のQOL（Quality of life：人生の質）と予後の改善をめざす長期的介入と認識されるようになりました。リハビリテーションの一般的な概念である身体的・心理的・社会的な回復だけではなく、運動耐容能、QOL、罹病率低下や死亡率低下といった長期予後の改善に加え、近年では心血管治療法の一つとして、血管内皮機能改善、自律神経機能改善、炎症性サイトカイン抑制、動脈硬化プラークの安定化など、多面的な効果が証明されています。

しかし、心臓リハビリテーションの大きな課題は、我が国では認知度が極めて低いということです。一般人対象の調査で、脳卒中・骨折後のリハビリテーションを知らない人が3%に対し、心臓リハビリテーションを知らない人は70%との報告があります。さらに、一般市民のみならず、医療者においてもそ

の内容や効果が認知されていない現状もあります。我が国の循環器医療がこれまで急性期医療重視で、教育に心臓リハビリテーションが組み込まれていないことが一つの要因ではないかという意見もあります。心臓リハビリテーションを標準的心血管治療へと組み込むためには、医学教育カリキュラムにより急性期医療から維持期疾病管理まで医療者としての視点をもつこと、また、一般市民への啓発活動により心臓リハビリテーション・二次予防の社会的認知を高めることが必要と思われます。

当院においても、循環器内科医を中心に心臓リハビリテーションに日々取り組んでおります。私自身は、本学会にて、当院で心臓リハビリテーションを行った心臓病の主婦2症例について発表しました。低心機能の主婦の退院後の生活において、主婦としての役割、家族との関わりを含め、QOLというものをどのようにとらえ、そのQOL向上のために理学療法士として何ができるのかという点について考えたものでした。この自分自身の発表の経験を含め、本学会においては最新の情報や知見を得ることができ、大変多くを学ぶことができました。これらを今後の臨床に活かし、患者さん一人一人が、「快適で活動的な楽しい生活を送ることができる」ように、微力ながらも力を尽くしていきたいと思っております。

最後に、本学会への参加にあたり研究開発調査助成を賜りました財団法人北海道心臓協会に対し、厚くお礼申し上げます。

編集委員長	田中 繁道（手稲溪仁会病院院長）
副委員長	加藤 法喜（市立札幌病院理事）
委員	後藤 大祐（北海道大学循環病態内科助教）
同	佐藤 伸之（旭川医科大学第一内科准教授）
同	竹中 孝（北海道医療センター循環器科医長）
同	土田 哲人（JR札幌病院内科診療部長）
同	三木 隆幸（札幌医科大学第二内科講師）
同	横澤 正人（北海道立子ども総合医療・療育センター循環器病センター長）

第22回伊藤記念研究助成金 納谷昌直氏(北大)、大平洋氏(北大病院)に

第22回伊藤記念研究助成金の贈呈式が、10月29日（土）、札幌・共済ホールで開催された北海道心臓協会30周年記念市民フォーラム2011の冒頭に行われ、納谷昌直さん(北海道大学大学院医学研究科循環病態内科学・非常勤講師)と大平洋さん(北海道大学病院第一内科・助教) それぞれに、菊池健次郎・北海道心臓協会副理事長から褒状と助成金75万円が贈られました。



左から納谷さんと大平さん

研究テーマは、納谷さんは「心筋血流動態の定量測定による冠動脈疾患の病態解明および心臓死の予測」、大平さんは「心電図異常を伴うサルコイドーシス症例の前向き研究」です。同研究助成金は、心臓血管病の基礎、臨床、予防に関する独創的な研究を対象に、北海道心臓協会が北海道在住者から毎年公募しているものです。

無料健康相談も開催



市民フォーラムの講演会に先立って、循環器疾患に関する無料相談が、午前10時30分から12時30分にわたって共催ホール特設コーナーで行われました。

医師4人、看護師、薬剤師、栄養士各1人による万全の受け入れ態勢の割には相談に訪れた方は少なめでしたが、その分、十分に時間をかけたやり取りができて、皆さん満足そうでした。



財団法人北海道心臓協会は設立30周年を迎えました

北海道心臓協会は平成23年11月26日で設立30周年を迎えました。

この間「循環器疾患の予防、診断、治療及び研究に関し必要な事業を行い、もって道民の健康の保持、増進に寄与する」ために啓発活動、研究助成事業等に、医事関係の皆様のご協力のもとに邁進してまいりました。

北海道心臓協会は30周年記念事業として、30周年記念フォーラム、記念リーフレットの作成、健康手帳の増刷の他、ホームページに循環器に関するライセンスフリーのイラスト集を掲載しました。このイラスト集は研究論文やセミナー資料などでおつかいいただけます。多くの医療従事者の方々が自由に利用していただければ幸いです。

心臓・血管病を防ぎ、健康と明るい生活を守ります

財団法人 北海道心臓協会

〒060-0004 札幌市中央区北4条西4丁目1番地 (株)伊藤組内
TEL 011-241-9766 FAX 011-232-4678
mail : sinzoukyoukai@aurora-net.or.jp
ホームページ : <http://www.aurora-net.or.jp/life/heart/>

北海道心臓協会

検索 ←

表紙

「雪の降る街」

藤倉 英幸